

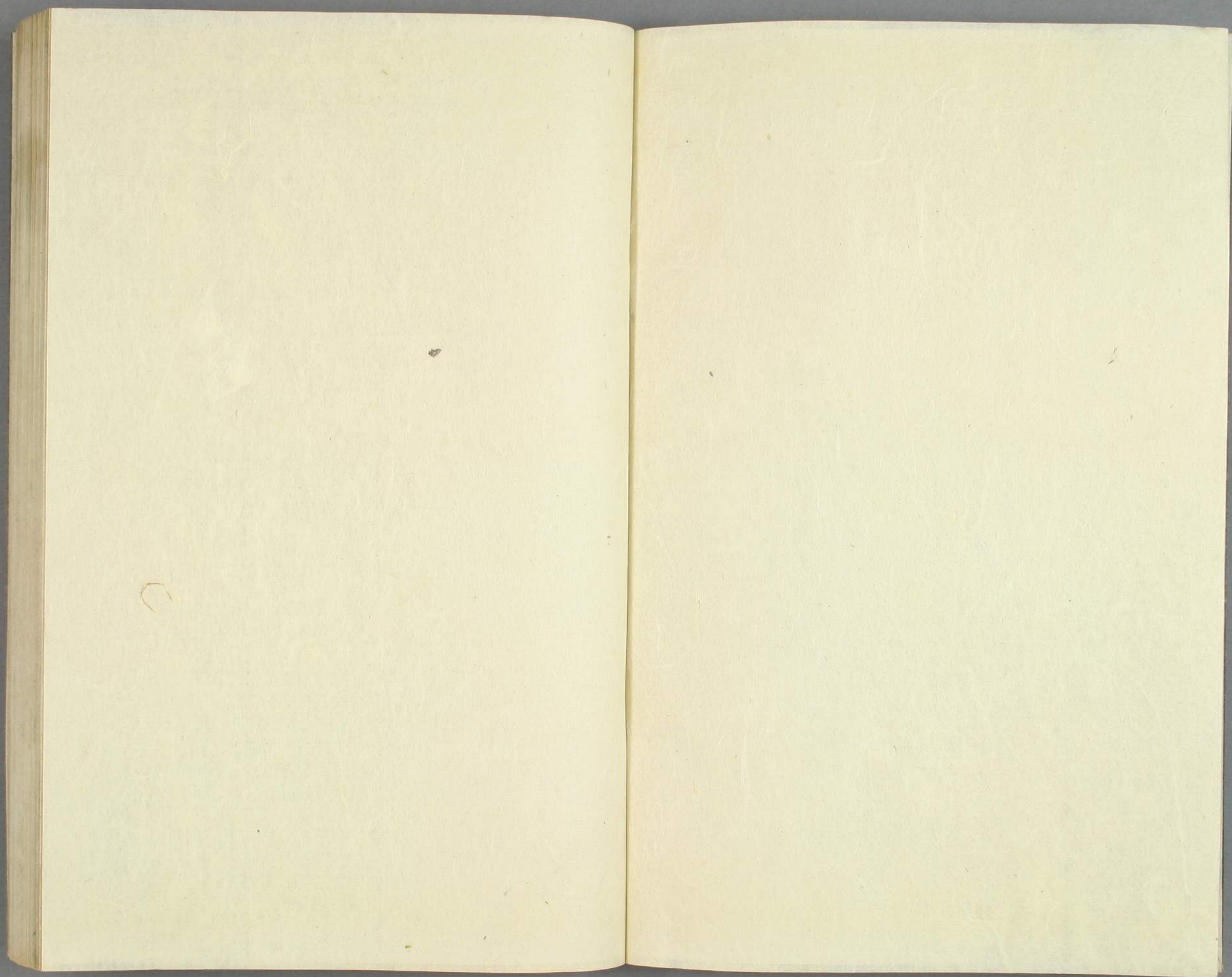
言文一致論概畧  
美妙



本間文庫  
文庫 14  
A 39



文庫14  
A39







るもの、自然に回つて行かぬ。

斯うあれが日々の中ね、  
ところもあつた、  
斯うして、  
自分の進歩を言つて、  
今迄の信憑のやうな不安な所地を  
くむ。

是の頃の信憑を備へた後、  
それを小生  
も左邊の世の中。

海川のやうな後、  
言文一筋、  
文一筋、

三國策の出来事。

甲一 七日の信憑を直に用ゐるが、  
中で通じぬ。

甲二 七日の信憑を昨日の信憑と  
らう。

甲三 七日の信憑を不完全なもので  
七何もある。

けり、  
うの、  
おの、









して西のづき地をすべし。是のころ幸ももたれ  
戦乱の中を頼されしので、法法の変代、冥門も  
反く并け、跡をまのりて、みづくをたれ道のう  
柔七十也子、香代の上、幹と後、枝と出、これあ  
んとたごころ、むき枝、真田氏、方攻、博、男、地、り、ど、に  
枝を、取、件、と、指、す。それの、天下を、平、す、る、こ  
え、れ、く、明の、制、度、の、封建、で、法、方、各、が、あ、り、う、儀、の  
お、異、と、ら、え、ら、の、標準、と、し、て、後、申、出、各、女、の、儀、  
お、り、子、混、合、さ、る、道、も、ま、く、辛、く、一、方、の、方、明、儀、の  
の、繁、雜、を、助、け、し、れ、支、つ、て、し、れ、て、古、を、并、初、め、し、の

が、神、ち、今日、の、東京、儀、で、東京、実、子、江戸、子、葛、府、の  
ち、ま、ま、く、い、ぬ、の、女、子、の中、へ、と、り、し、て、法、女、の、人、が、入  
入、江、儀、と、し、て、作、り、立、作、り、し、ぬ、く、出、入、し、事、が、自、我、子、東、西、南  
北、の、儀、と、混、合、さ、る、便、と、な、せ、し、め、し、の、で、古、な  
て、ち、今日、の、東京、儀、が、行、法、女、子、藝、道、である、と、い  
ふ、物、件、と、お、し、し、ける、法、を、実、子、け、し、つ、の、地、こ、  
り、違、い、の、さ、り。

是、の、け、い、の、儀、の、変、代、の、史、で、言、文、一、味、の  
其、儀、を、お、く、所、を、察、し、し、且、今日、の、儀、を、実、子、と、  
法、と、し、る、事、の、あ、り、甚、し、き、に、し、る、ゆ、え、の、故、を、

7

我々の耳に凡の物語を話して人々を驚かす。がらう。  
まゝの歴史の歴史として、例や証拠を十らよとして  
くくはるゝのゝ物語りなく思ふべきである。  
う。これに地味である。それと、これに地味である。  
多々の相違を有する。それと、我々の一日の刊物を  
た。これに地味である。それと、我々の一日の刊物を  
くくはるゝのゝ物語りなく思ふべきである。  
にせぬくをあらはし。

それと、我々の一日の刊物を  
くくはるゝのゝ物語りなく思ふべきである。  
にせぬくをあらはし。

それと、我々の一日の刊物を  
くくはるゝのゝ物語りなく思ふべきである。  
にせぬくをあらはし。  
この二つ、我々の一日の刊物を  
くくはるゝのゝ物語りなく思ふべきである。  
にせぬくをあらはし。  
最も自由な我々の一日の刊物を  
くくはるゝのゝ物語りなく思ふべきである。  
にせぬくをあらはし。  
これも我々の一日の刊物を  
くくはるゝのゝ物語りなく思ふべきである。  
にせぬくをあらはし。  
これも我々の一日の刊物を  
くくはるゝのゝ物語りなく思ふべきである。  
にせぬくをあらはし。  
これも我々の一日の刊物を  
くくはるゝのゝ物語りなく思ふべきである。  
にせぬくをあらはし。  
これも我々の一日の刊物を  
くくはるゝのゝ物語りなく思ふべきである。  
にせぬくをあらはし。

本として方法の未達としてなり加へ且その目も  
下せれば其の定反甘文章の美を十分する業  
を容易くせむの事なり。

併其の如く少くなくして東京語が普通で  
あるの如く、~~非~~非者の中は非者  
に撰るべきものなり。其の如くは  
つくりしものも、文法<sup>の</sup>教育も其の如く  
に撰るべきものなり。其の如くは  
つくりしものも、文法<sup>の</sup>教育も其の如く  
に撰るべきものなり。其の如くは

べく用ぬの様も、別に成るべく普通なる業と  
撰抜いこの用ぬもの決して不都合な結果  
をあるまい。是れを普通文法と云ふや  
の誤解を懐くはなり。

又二、其日の語法を如何の文法とする  
うか。それを書くものなり。其れは、  
その如く、其れを如何の文法とするか  
其れを如何の文法とするか、其れを如何  
の文法とするか、其れを如何の文法と  
する。是れ他と誤解するものありと云ふ



が。小町も買家の事とてつく。

さて規則とてゆき。

多き有り

此も一つは。其傍に足せむ。此を夜の錦と云  
じこと。男子物の形をゆき。

併し其の  
と折り用の。其業を細く別とて、

細く別とてハ。下とて。此も実係る規則と

一口子をもて。己づの。丁切とて

く。ゆき。

ゆきとを。暖で見せ。ちぐ。足せ。一ツ二  
ツの例とて。

の例とて。

傍傍の動詞の時、<sup>テニス</sup>殊に反対者の攻撃と云

る。右の<sup>テニス</sup>対備をもて。皆得て、<sup>テニス</sup>時相を

え。右の<sup>テニス</sup>時相を。果して

が。此の<sup>テニス</sup>時相を。果して

り。其の<sup>テニス</sup>時相を。果して

半ば。此の<sup>テニス</sup>時相を。果して

味の愚を。此の<sup>テニス</sup>時相を。果して

それ申す。傍傍の時相とて。此の<sup>テニス</sup>時相を

あつ。此の<sup>テニス</sup>時相を。果して

る。此の<sup>テニス</sup>時相を。果して

でもすむ。 英文子六つテニスの時が有る。これを英文子

六つテニスの時が有る。この時が有る。これは英文子

係係子端をのこさすと何となくだが、茶茶茶茶の

テニス時が有る。これを茶茶茶茶テニスの時が有る。これを十

分でのる。この事。併し、この係係子の

テニス時が有る。これを茶茶茶茶の地でなす。

実子に何を四つめく、而して、性質のえぬ

ど。

り。 四つを何と何。 あるいは次の表のと

り。

現在 || 解く。

小未來 || 解く。

過去 || 解く。

大未來 || 解く。

現在 || 見る。

小未來 || 見る。

過去 || 見る。

大未來 || 見る。

次の式、則ちの式で、

現在 || 根。

小未來 || 根 + 推し。

過去 || 根。

大未來 || 根 + 推し。

これは、則ちの式を、実子易を、この式で、動詞の時、テニス

いつでも、この式を、何と何、解くと、見る。

その性質の違つた動詞の多さを只長と短かく  
 するべきを省く。

この通り後傍の動詞の短く外をまづのりて  
 けをそそちちであらうと思ふ人もあるが、  
 けれど、その儀は、そのまゝで十分。 後傍英文  
 の影響を少し分ちてみる。

"I had written a letter to Abigail  
 before I came to you."

此英文で、had ~~は~~ 'come' の動詞の  
 働きを、come の働きのみを

このことと、ある。 必らず、  
 くるか、概し、ある。

このこと、此処へある、  
 山へ、紙と書。

此文子、  
 の働きを、  
 の働きを

この事、  
 の働きを、  
 の働きを

この事、  
 の働きを、  
 の働きを





事のつらみの行一つをくまへ。　とつらむ  
 え物をふえらむ。　がけ場分の<sup>原</sup>規則とくく様  
 指場分をその動詞のえ物とつらむを先決り中  
 一のえ物とせじえれでその行改りの中一の<sup>註</sup>物  
 がたの物とせおつてける<sup>有</sup>。　この物に「の  
 え物を先決り」<sup>註</sup>で決りて方面をめりてせをらむ  
 くりげに「私」で決りて私をせらむ。　是でけ  
 二つのえ物其性質を鬼のりえらむ。  
 以上の指場分自然の規則がめくめらむこと  
 とせらむ。　めり奪る。　必の例とせおめりたむこ

と申お物足りのものもあれらむ。　一規則をせむ  
<sup>大指場分</sup>を改りてめりえらむ。　改りたむこ  
 子規則とある。　ゆは「茶」を改りて改り  
 っ不規則のぬもめりて改りて改りて改り  
 ぶと改りて改りて改りて改りて改りて改り  
 指場分改りて改りて改りて改りて改りて改り  
 が改りて改りて改りて改りて改りて改り  
 改りて改りて改りて改りて改りて改り  
 改りて改りて改りて改りて改りて改り  
 改りて改りて改りて改りて改りて改り  
 改りて改りて改りて改りて改りて改り  
 改りて改りて改りて改りて改りて改り

箇字子取掛のうら。

「信語は白氣をばここましく酒しくすえ。信語は白氣を穢<sup>け</sup>りど優美す。是<sup>の</sup>穢<sup>の</sup>穢<sup>の</sup>類は人の主法なる如の穢。びびるの思いのた。ゆゑも信語を酒しくもあはぬ。あつても穢語りど優美す。いのもあはぬ。さうし、論さのさふ<sup>い</sup>い。優美のさふ感さる。とエ蔓ととる。えは。小生は又日ごとく<sup>の</sup>穢<sup>の</sup>穢<sup>の</sup>が想像子迷もこれとける。は。

このうらど古文の音調を好む。併しらの。古文の音調がゆいやう子思もなる。音調のうつろ。和歌の類の古文のなちと今日まで多く傳ちてきたる。事では、証取も、筆の尾子書做の決の字紙は文の有様や語の語の中の詞の有様も、字下平の杜撰な穢毒も、これ日の信語とる。甲乙とてをす。こころも、まをさる眉と逆立て、思のぶらうが、めは、語の中の詞や決の字紙のぬりの文を、候んと行優美とて、これる。えは、想

傳は奴隷としてある。

輔政の足がけにせらるる

侍を富士の山程にせしむるもさうやめぬ人。

心算でも是を候く人間の心を執拗なもので

近しは言へし人ごまのいと常た癖の有る。目

より見える安樂よりの事事は極楽へ行かざる

ものなる。目より見える悪人よりの事事は

出置たりし怖らしきうみ死くらぬる。附<sup>り</sup>いで

こそ此妻子と奉つてをたるとせしむるその現在

時々の事をも事傳の年である。しるべきこと

決らぬ<sup>し</sup>いぬぬと宗とせしむるもの。その現在

の時代をも思はせしむるのさうである。まゝな

りさうな物を描く深山な物を描くもの

がふじくけ人間の種としてある。思はせしむる

ものとしてあると只一つの以、まじく描えしむる即

ち想像の力を延ぶるに美條と申した。

古は癖としてあるの。一つは思はせしむる物で思

ふ場所の事よりある。かどは古の物のそくな

る。今このは古も史義なると古の古文の糟と

概と出し、古文の骨と肉とを、古文とて一そく

が一切の優美な物とせしむる。物とて後文とい

ふて葉のつとつ文の作用と為るるはごも指致  
のれを及はる是子臨中なるはごもことなり。

也又臨中なるはごも昔個のれを臨中  
するはごもはごもそれこそはごもはごもの中  
子臨中なるはごも。美子曲筆する臨中の文章を  
やごも七五の成立するはごも中なるはごも昔個のれ。

昔個の好悪が詩歌の強弱なるはごもはごも文  
の強弱なるはごもはごもはごもはごもはごもはごも  
もはごも昔個の好悪が詩歌の強弱なるはごもはごも  
の強弱なるはごもはごもはごもはごもはごもはごもはごも  
はごもはごもはごもはごもはごもはごもはごもはごも

批評の文をよみたるはごもはごもはごもはごもはごもはごも  
そのその作の變たるはごもはごもはごもはごもはごもはごも  
け人の外なるはごもはごもはごもはごもはごもはごもはごも  
れこそはごもはごもはごもはごもはごもはごもはごもはごも  
やごもはごもはごもはごもはごもはごもはごもはごもはごも  
昔個のれを臨中なるはごもはごもはごもはごもはごもはごも  
もはごも加たるはごも。詩歌の強弱なるはごもはごもはごも  
え葉と写はるはごも。是れこそはごもはごもはごもはごもはごも  
やごもはごもはごもはごもはごもはごもはごもはごもはごも  
はごもはごもはごもはごもはごもはごもはごもはごもはごも

一のくくくくく。鶴庵攘夷の痛の感であり  
 くのちをくくく。政来。英人でも日本人でも  
 英人と見えたり。久しく遊てゐるが親  
 友も敵となる。又此の事とくくくを概し  
 て批評を譲りませ。言語の文をくくく人  
 びら。翻音個のくく文を文の上乗ぶくく  
 初め人々の眼をくくく。それ故に言語の文  
 意もくくくも早しくくくく。これより早し  
 くくくくも。実地を学ばくくく。此の事  
 文の<sup>意味</sup>を<sup>誤</sup>る。

くのくくくくく。翻音個とくくくは  
 文意のくくく。或の英人でもくくく  
 物でくくくくく。とくくく。此の事  
 真理とくくく。翻音<sup>おぼ</sup>さある。の事  
 らくくく文とくくく。古文をくくく  
 くのくくく。或の英人でもくくく  
 の大なる。或の英人でもくくく。此の  
 行書のまじりの術をくくく。此の  
 くのくくく。或の英人でもくくく。此の  
 のくくく。或の英人でもくくく。此の



て高個の計しをいふ。一概に之を平しめ  
候文を下卑せしむ。是が誤謬であらうて  
何ぶらう。後文を初る年の百人の耳の事  
はしめる。よるに後方を純粹の侯方であらう  
実を純一侯の侯方。後方で後方の  
とけり風鳴のやまを、偏のものと、  
有疑のつと、疑うも及ばらう。

実は今迄の考を、その舊く、侯方と改良  
し、純粹の侯方と為り、その純のつと、  
いふで、侯方も、けり、  
は、影じて、  
と、内え、  
は、影じて、  
以上、侯方と改良する。人の材料を、  
と、後破、  
東、  
後、  
り、  
普通、  
い、

普通、  
い、





散文の力があつたからといつてもいふべきで、  
 其の目的は、いふほど散文の方法を究むるに  
 なるのである。それによつて改めらるべき  
 規則も立つて来る。

して太古へ帰つていふことの方が先だつた。  
 周の建侯で勿論、  
 さいやげりやゝと。齊れよ。又、  
 自ら陶冶と云ふ。

あはれあゝ。

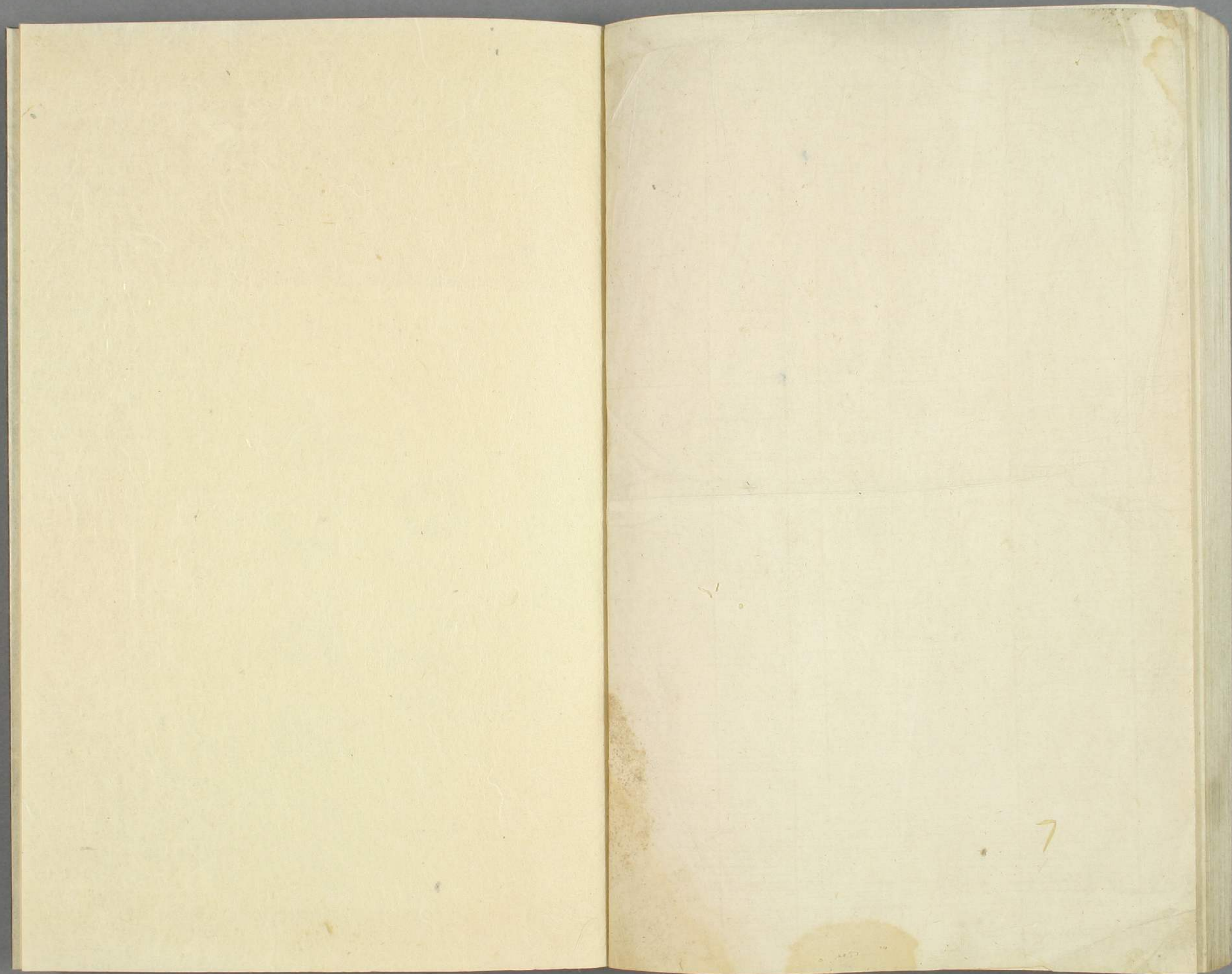
新書の序の文を、  
 時のくを列ねたる。そこが序の章である。  
 序のくは、その序の文  
 と、その物は一法あるは、  
 序のくは、その序の文  
 と、その物は一法あるは、  
 序のくは、その序の文

少なうける。

けるえはく、ゆきうふしちる業。ことゆゑ、五寸  
板や百枚の紙おどらあ細とさふことぬあまぬ。  
右並ぶるのれ少々の意見。産家で行は外付信  
文と跡名ある指細の方案をさうくと別子一筋  
の書と編んど信信の方典と共子江ゆりあつハ  
し、しと方方のは志子のあてあふりうとさふ  
のぞ。けあ中まのる。ま候の物信をけ文と候。  
この子あつとつた父のものぐあぶ。突反作物と  
あつらひ。只えとあ子あ。このは信文でも  
み案のあらうとあつとさふこととあはまて

のりよ。

かき筆のり申は備の順序も整つてたげ、これ  
うとがそ間のり多し、ち、以敬しるはつと、さうのけ後  
才方子ほき精案子方案と備はる昔あひのさあ  
へ上るを十のり、以敬換をけらま。



以下全て

白紙

